

ふすま同窓会支援事業
海外チャレンジ支援プログラム 渡航成果報告書

山形大学大学院 社会文化システム研究科

文化システム専攻 2年

園部 祥

1. 渡航の概要

渡航国：スペイン（マドリード、セビーリャ）

渡航期間：平成 26 年 12 月 7 日～12 月 14 日

渡航計画のタイトル：「1660 年代におけるムリーリョの教会装飾の調査」

渡航期間のスケジュール：

日程	主な活動
12 月 7-8 日	移動 山形→東京（羽田国際空港）→パリ（シャルルドゴール空港） →マドリード→セビーリャ
12 月 9 日 （セビーリャ）	1660 年代のムリーリョの教会装飾であるサンタ・マリア・ラ・ブランカ聖堂、サンタ・カリダード聖堂、カプチン会修道院（現在、セビーリャ市立美術館となっている）、その他にセビーリャ大聖堂を含む、4 つの教会の内部調査。
12 月 10 日 （マドリード）	プラド美術館にてムリーリョの作品、彼に影響を与えたとされる他の画家達の作品の調査。
12 月 11 日 （マドリード）	ティッセン・ボルネミッサ美術館、王立サン・フェルナンド美術アカデミー、デスカルサス・レアレス修道院にて作品調査。
12 月 12-14 日	移動 マドリード→パリ（シャルルドゴール空港）→東京（羽田国際空港） →山形

- ✓ 修士論文の提出もあり現地に実質 4 日間という短い期間であったが、重要な場所をまとめてみる事ができた。というのは、平成 26 年 6 月にスペインのマドリード、セビーリャには調査旅行としてすでに渡っており、さらに修士論文を作成するなかで、もう一度確認すべきことが明確化していたからである。

2. 渡航の成果

本渡航の最大の目的は、現在もその殆どが当時の姿のままである、1660 年代のムリーリョによる 3 つの教会装飾を見て、比較することであった。今回、その教会—サンタ・マリア・ラ・ブランカ聖堂、サンタ・カリダード聖堂、カプチン会修道院—の作品を、自分の目で見ること、複製図版では分からなかった点を発見できた。実際に教会に置かれてい



サンタ・カリダード聖堂内部



サンタ・カリダード聖堂装飾
ムリーリョ 《ホレブ岩の奇跡》

る作品を比較すると、画家が飾られる場所によって絵の表現を変化させていたことが分かる。

修士論文で中心に取り上げたサンタ・カリダード聖堂には、11 枚のムリーリョの絵画—このうち、7 枚が本物であり 4 枚がレプリカである—が飾られている。この聖堂は、画家が行った教会装飾が当時のまま再現されており、聖堂内でこれらの作品の配置を見ることは、

ムリーリョの絵画同士、さらにその聖堂建築との関係性を考える上で、重要な手がかりとなった。特に、聖堂の両壁の上部に置かれた 6 枚の作品は、下から見上げることが想定されていることが分かる。主祭壇の近くに置かれた《ホレブ岩の奇跡》では、馬に乗る少年と視線が合うように意図されており、尚且つその少年の指が、絵画の先にある主祭壇へと視線を誘導させる働きがあるように感じられた。

また、窓から差し込む光によって、作品の色彩

が図版でみたときよりも少し明るいことに気付いた。

次に、サンタ・マリア・ラ・ブランカ聖堂であるが、このムリーリョの作品は現在、マドリードのプラド美術館とパリのルーヴル美術館に所蔵されているため、聖堂に置かれた状態で見学することはできなかった。しかし、建物は当時のものであり、その装飾も 17 世紀のままであるため、作品が置かれた場所は今も残っている。したがって、作品があった場所に、窓からどのように光があたるか、また、どのくらいの暗がりには置かれたか、などは実際に見ることで知ることができた。特にこの聖堂は、6 月に訪れた時、教会の内部の調査ができなかったため、実際に中に入ってクーポラなどの装飾や、採光窓を見ることができたのは、とても有意義なことであった。サンタ・マリア・ラ・ブランカ聖堂に置かれた作品のうち 2 点は、12 月 10 日に訪れたプラド美術館で実際に目にし、もともとあった場所に置かれた場合どのように見えたか、を合わせて考察することができた。クーポラ下に置かれた 2 つの作品の上部には、光に包まれたマリア像が描かれているが、この部分には採光窓から光が差し込むため、



サンタ・マリア・ラ・ブランカ聖堂
クーポラ部分

左右の壁が剥きだしになっている部分にムリーリョの作品が飾られていた。

(現在、プラド美術館に所蔵)

より神秘的にマリアを見せるために、光が当たる部分に描いたのではないかと推測できる。

カプチン会修道院は、改装されて現在セビーリャ市立美術館になっていた。祭壇としての飾りは取り払われているが、ムリーリョの作品は当時と同じ場所に配置されている。このうち側壁に置かれた作品群は、ちょうど鑑賞者の視線にリアルな物を置くことによって、絵画空間の中に入る工夫がなされていることに気付いた。

以上のようにほぼ同じ時代に描かれた作品でも、教会に置かれる場所によって、視線誘導を存在させたり、リアルな表現、もしくは光に包まれた天の表現を、効果的にムリーリョが使用していることが、実際に教会の中で見ることによって分かった。また、セビーリャでは、これら3つの聖堂の他に、大聖堂にも赴いた。ここに飾られるムリーリョの作品は、同じ1660年代と、それ以前の1650年代のものがああり、彼のスタイルの比較考察に役立った。

マドリードでは、ムリーリョや同時代の画家の作品の調査を目的として、美術館や修道院を訪問した。特にプラド美術館において、当初予定としていたある作品は、展示の関係で見ることができなかった。しかし、特別展として「スペインの画家達の素描展」が行われており、そこでムリーリョの素描を実際に目にする事となった。それらの素描の殆どが、セビーリャで見た作品のもととなったものであり、画家の絵画構成の考えを読み取ることができた。

また本渡航では、修士論文に必要な文献もいくつか入手することができた。これらの多くは教会や美術館に置いているものであり、そこに赴き文献に目を通して購入できたことは、大きな成果の1つと言える。

以上のような渡航先で得た成果は、修士論文（1660年代のムリーリョにおける教会装飾—サンタ・カリダード聖堂を中心に—）に主に活用した。サンタ・カリダード聖堂での作品の配置やその色彩は、論文中、聖堂内の作品について言及した第2章と4章の考察に役立っている。また、その他の教会装飾は、主に第6章で取り上げているが、これらを比較して感じた相違点は、本論文を進めるにあたっての動機となった。

実際に作品や、それらが教会を装飾している様を見たことで、教会や作品の比較ができ、その教会独特のムリーリョの工夫について考察を深めることができたのが、この渡航の最も大きな成果である。そしてその成果を修士論文に生かすことができた。この点で、本渡航における目標は達成できたといえよう。



ホテル・ムリーリョ
セビーリャ大聖堂の近くのホテル